

ているほか、省農薬が求められる向きもある。機械除草技術の開発が期待される理由である。プロジェクトでは、北海道をはじめとした畑作で実績のある条間・株間除草技術などを活用して、さまざまな品目や土壌条件に対応できるような技術の開発を進めることとしており、特に、転作田での栽培にも対応できるように、碎土の悪い条件でも十分な除草効果が得られる安定した除草機を開発することを主要なテーマの一つに据えている。薬用作物ほどではないものの、大豆でも使用できる除草剤が限られている状況は似通っているので、このような除草機開発の取り組みは、大豆栽培での難防除雑草対策への応用も期待される。

ところで、雑草分野の研究員の数は、同じ作物保護分野の病害や虫害と比較して極めて少ない。一方で、解決しなければいけない課題はますます増加の一途をたどっている。人材の確保は大きな課題だが、農業研究全体の効率化が求められている現在の状況を考えると、実現は難しいと考えざるを得ない。したがって、今後は関係機関で情報を相互に共有するとともに、技術開発の場面でも、それぞれに得意な技能、知見を持ち寄って協力しながら事にあたることが求められる。そのような雑草分野での情報共有・協力の輪を広げ、確固としたものにするこも、このプロジェクトの大きな役割ではないかと思っている。

雑草イネとは

雑草イネとは、栽培を目的として水田に移植あるいは播種された栽培イネ以外のイネで、栽培イネとの競合や収穫物への種子の混入等により減収や品質低下などの雑草害をもたらすイネ

であり、問題が拡大しつつあります。当協会では長野県の協力を仰ぎ、農薬会社からの試験希望薬剤について適用性試験を行い、雑草イネ有効剤としての実用性を判定しています。



写真-1 雑草イネ(刈り後再生株から出穂)



写真-2 未熟でも手で握るだけで脱粒



写真-3 左：雑草イネの籾・玄米 右：栽培イネの籾・玄米(画像：長野農試提供)